

# 山と博物館

第42巻 第11号 1997年11月25日

大町山岳博物館

冬期特別常設展 八方尾根・近代スキーの父 福岡孝行

1997.12.2～1998.3.31



福岡孝行（昭和12年頃）

福岡展開催にあたって

丸山 彰

いよいよオリンピック開催まであと僅かとなった。世紀の大事業が私たちの近くで開かれることは大変光栄なことである。私も特に八方尾根には数えきれない思い出がある。

麓の細野（現、八方）に戦争中家族とともに疎開し、農家の一室を借り、不自由な生活のなかでスキーにかかわる本を書き、翻訳を続けながら八方尾根の開発に尽くした今は亡き福岡孝行先生の功績は忘れることができない。誰からも親しみ愛された先生の人物は、細野の人達に信頼された。いろいろの難問題はあったが、それぞれを解決して昭和二十二年三月、念願の第一回リーゼンスラローム大会の開催にこぎつけた。大会の前夜は遅くまで準備に追われ、僅かの睡眠しかとらなかつたにもかかわらず早朝五時起床、スキー板を担いで黒菱の出発点まで三時間歩いて登り、時間を合わせた最も大切なストップウォッチを懐に先生が前走を務めた。通信手段の拙かった当時は、出発係と決勝係が事前に時計を合わせ、打合せた時刻によって競技が進められたのだ。福岡先生はこの大事な時計を懐に名木山の急斜面を凜とした真剣な面もちで見事なフォームで滑り降りて行った。その時は名木山の途中に立っていたのだが、先生その姿を今も鮮やかに思い出す。自分が提唱して拓いたコースの責任者として前走を務めた先生の立派な態度と優れたスキー技術に、下で見守る大勢の観衆が一瞬とよめき、拍手がいつまでも止まなかつた。

その後大会は半世紀にわたって続けられており、毎回千人を超す参加者を得て、権威ある地方大会として定着している。オリンピック男子滑降コースは、先生の拓いたコースに沿って行われる。ご存命であつたらと残念でない。

先生は自著の冒頭に「スキーこそわが生命」と書いている。スキーへの深い思いがうかがわれる。

（大町市在住、山岳博物館顧問、日本山岳会会員）

福岡展は山岳博物館一階展示室にて三月三十一日まで開催します。通常料金にて本展もご覧いただけます。

（毎週月曜日休館）

ご高覧のほど、お願い申し上げます。

（大町山岳博物館）

# わが父福岡孝行をおもふ

福岡 孝純

一、朝日に映ゆる白馬の  
千古の雪を眺むれば  
若き血潮はたかなりて  
希望は燃ゆる我が胸に  
二、  
(略)  
三、理想の峯は遠くして  
試験のあらし猛けるとも  
太平開かん日の本の  
強き細野の我が盟

これは、父孝行(一九一三—一九八二)が第二次世界大戦後、疎開先だった細野(現白馬村八方)の青年団のために作曲した歌の歌詞である。戦後の荒廃と貧困の中、父は食べるために田に出て、その片手間に地元の人々と夢を語り合った。冬はもっぱら若い人々とスキーをし、帰っては地炉を開んで、外は雪の吹きすさぶ中、スキー談義に花を咲かせた。

父は大いに夢を語った。「イタリヤのドロミテのマルモラータには、大滑降コースがある。」「ドイツのガルミツシュ・バルテンキルヘンにはすばらしい大回転(リーゼン)コースがある。……細野はこのようなスキー場に決してひけをとらない……」と。

その八方で今年、冬季オリンピックのダウヒルとスーパージャンプや複合競技が開かれる。

「志あるものは事ついに成るなり」と後漢書にあるが、当時リーゼンスラローム・コースを開いた人々の情熱はついに八方を世界の檜舞台にまで押し上げたのだ。夢は現実(ドリームズ・カム・トゥルー)となった。

一生スキーにスポーツに夢を追いつづけた

父孝行は、どのような生い立ちをたどったのだろうか？ 大正二年に生まれた父は幼少時は病弱気味であり、それゆえ小学生のときは東京を離れ、相模の国辻堂海岸に引っ越し地元(の学校)に通った。そして海洋性の自然豊かな環境の中で健康をとり戻す。身体を動かすことに興味を持ち、東京へ戻り、学習院における中学生生活では陸上競技に打ち込み、八〇〇m、一五〇〇mの記録保持者となり、続いて高等科では八〇〇m、一五〇〇mともにインターハイで優勝し、学習院の黄金時代を築いた。この時の好敵手が早稲田の中村清である。



陸上トレーニング中(中学時代)

スキーは中学生のときにハンネス・シュナイダーの来日に大きな刺激を受けて始めた。大学生になり、練習のしすぎで気管支炎になり陸上競技を引退してから本格的となった。このころから登山とスキーに急速に傾倒していく。夏山、冬山、岩登り、スキーツアーと深みにはまってゆく一方で、大学では言語学を専攻し、ドイツのウイヘルム・フォン・フンボルトやゲーテ、シラー、カントなどから大きな影響を受けた。特にフンボルトの信念である「詩と哲学の総合により人間は

魂の最奥の深みに達する」ということに感銘を受けた。そこに父はギリシア的なものの、よりダイナミックな自然と相対するロマン主義としての復活を見たようである。そしてその一方では日本語の素晴らしさに魅せられ、国学をひもひもといたり神道を追求したりして、日本語、特に日本の地名と言葉のかかわりにも強い関心を持った。東大の言語学科における卒論は「雪崩の言語表現の地域差に関して」であった。

また、人間行動の倫理的側面にも興味を持ち、和辻哲郎や鳥居龍蔵の考え方も影響を受けている。父孝行の行動の特徴は、書齋で考えるだけでなく大自然のキャンパスに身を投じ、そこで行動することにより人間は全き人間としての自分を取り戻せると



立山登山中(昭和7年、左端)

昭和十二年に孝行は、シュナイダーらスキーの名人が出演した「スキーの驚異」という映画に触発され、日本のスキーの名選手すべてを一室に集めた三十五ミリ映画「スキーの寵児」を自ら監督制作して、帝劇でロードショーした。そして翌年「シュプール」という本を、登山とスキー社から刊行した。この本は単なるスキーの技術書ではない。それは七〇余名のスキーの名手のシュプール(歴史)であり、スキーのファッショニッシュの書である。「晴れわたる青空」で始まったこの本のロマンティックなエンディングは「今はスキーこそ生命(いのち)なのだ」で終わっている。

孝行のスキーの方法論はこの本にすでに言い尽くされているが、その本質は、いくら道場で剣道がうまくてもしょうがない、実践こそ全てである、スキーもすべてその通りであり大自然のなかで通用してこそ真のスキーである。



大学時代

あるとして、形式主義を嫌っている。不幸にしてこのころから日本のスキー界は、フランス式のひねるスキーに毒されてゆくが、孝行はひとり敢然とこれと斗い、自説を主張した。『今日のスキー』（一九四四年）、「自然なスキー」、「正しいスキー」（一九四八年）を出版し、ひねらないで外傾によってカジ取りをするスキーこそ正しいスキーであると述べたのである。また、猪谷六合雄氏が極端な外傾を千春少年にすすめた時も、これをウルトラ外傾であるとコメントしている。

このような流れの中で、父はオーストリアのバインシュピール技術（脚部の技術）をどうしても紹介せねばと思うにいたり、オーストリアスキー教程の訳出とクルッケンハウザー教授招聘による正統派スキーの実技指導へと日本のスキーの歴史は流れゆく。現在日本のスキーの第一線は活躍している人の多くが当時クルッケンハウザー教授のアシスタントをしていたアイスパーレン（白熊…助



「スキーの寵児」撮影中（昭和12年）

手の愛称）で占められていることから、スキーの本流を創り出した孝行の努力が見て取れる。

しかし孝行が欲したのは技術論争ではない。「壁のような急斜面を無造作にテンポクリスチャニアで滑り降りるスキー家の姿は、正に自然であり無為であり、大静の美と言えるであろう。何気ない無造作に秘められた勇敢はまた同時に最高の優雅であり、この二つは決して相反して対立するものではない」と「自然なスキー」の中で述べている。

同様に、「スキーの心身を調整、強化するはたらしき 自然との調和格合の要求は われわれにとつて自然必然的なものであり われわれを退化 逸脱からまもる真の文化価値を有するものといえよう」とも述べている。孝行にとり自然、山は古典以上の古典であったし、アルピニズムはこの自然との調和格合への探究の跡であった。

「物を格（ただ）して知に到る」と礼記にあるが、孝行の自然との対話のなかで博物とすることは大変大切であった。文化人類学や民俗学的な流れを好み、戦後、大町に山岳博



福岡一家（昭和26年頃、右端筆者）

スポーツや健康づくりの広汎な領域に関心を有した父であったが、晩年は特にスポーツ・クラブ的な精神のもとに地域共同体を構築することに強い意欲を持っていった。これは一九七六年に第三〇回を記念して名木山ゲレンデに建立

物館が建設される時には大変な情熱を注ぎ込んだ。

父はしばしば私達子供にもルソーの「エミール」から引用し、教育には自然による教育、事物による教育、人間による教育、の三段階があると述べた。

一九六三年に孝行は西ドイツに招待され、「日本とオリンピック思想」というテーマで講演し、ドイツオリンピック協会から黄金のブラケット（メダル）を授与された。すでにドイツとの交流は戦前から続いていたが、スポーツ哲学、スポーツ文化、方法論、コーチ学、トレーニング法など多岐多様にわたる日本への紹介が授与の理由だった。

ドイツのスポーツの哲人であるカール・デーム教授や、ゴールデンブラン（スポーツ施設建設のナショナルプロジェクト）の立案者であるゲルト・アーベルベック氏、また日本の伝統的な武道家である小笠原清信氏らとの親交を通じ、スポーツ活動こそ人間にとりかけがえない価値を有する普遍的なものであり、すべての人々が将来はスポーツ活動の素晴らしさを味わうべきであると考えていた。



クルッケンハウザー教授と（昭和54年）

された八方リーゼンスラローム大会の碑の詩にも見えてとれる。

翔心

しろうまの美しき地に  
むらびとの心一つに  
若人男女力あわせて  
天かける白馬のごと  
スキー駆るコース拓く  
アルプスのふもと  
南は大町、北は小谷  
相よらいて  
リーゼンスラロームコース開く

孝行は常に夢を追い続けた。常にバイオニアとして、種々の面で多様な活動を繰り広げた。しかしその心はいつも人々に開かれており、人々と語り、共に生き、共につくりあげてゆくのが大好きであった。そして自然にもどることによりいつも全人的な、全き生命の調和のとれた生き方を大切にしたのである。

（株）日本スポーツ文化研究所長

## 自分だけの宝物

渡辺逸雄

太平洋戦争終戦の翌年、旧制大町中学一年生になった私は、大人と子供位もの体格体力差のある五年生までの全校マラソンで、どうしたとか五百人以上の中で五十七位になってしまった。

「おまえは北城村（現白馬村）からの汽車通だからスキー部に入れ！」

「おまえは全校マラソンで五十七位だから、デイスタンス（今のクロスカントリースキー）をやれ！」

なんととも恐ろしい先輩の命令には唯、「ハイ」と言わざるを得ない時代であった。

当時大町には開店したばかりの運動具屋さんが一軒あり、学校の帰りの汽車の時間まで、スキーの金具（バックケン）の取付や、スチールエッジの取付を手伝ったものだった。その店へデイスタンスのスキーを注文したのに、入荷したのはイタヤの単板で幅の広い普通のスキーだった。何のことはない、運動具屋のオヤジさんはスキーに関し

ては素人だったのだ。そこで学校の体育館の縁の下から、くもの巣だらけ土埃だらけの、古い古い先にシールをひっかけイボのついたスキーを探し出し、お大工さんに頼んで横を削って細くし、石綿を濡らしたドラム（木を曲げる蒸し器）で蒸してバンド（曲り）をつけてもらって、ようやくデイスタンススキーが出来上がったが、我々が

なかなかのものだった。

ストックは、石突きへ入る太さの、節の揃った竹を探して長さを身長に合わせて切り、リングを細皮で編み、手皮を付けて自慢の手造りストックの完成だ。

靴が難問だった。当時デイスタンスの革靴など中学生の私にはどうあがいても手に入る代物ではなかった。しかし戦時中兵隊さんの履いていた軍靴は、終戦直後ゆえ世間に広く出回っていて比較的入手し易かったのでこれに決めた。靴屋さんに頼んで先を短く、幅を狭くし、底皮を加工してもらい、ようやく子供用ともいえるデイスタンススキー靴ができた。そしてパラフィンを溶かして筆で塗って防水処理をしたものだ。

大変な苦勞をしてようやく手にしたデイスタンススキー一式だ。それこそ大切に、手入れもよくしたものだ。サラリーマンとなった頃は時代も変わり、運動具店も増え品数も豊富になり、手軽に良



昭和25年、手造りのデイスタンススキー一式にてスキー大会に出場



昭和27年、燕山荘前にて

い物が手に入るようになったが、初めて得た手造りのストック、リサイクルのスキーと靴には妙に愛着を感じ、自分だけの、少年時代の忘れられない宝物として長く残しておいた。しかしいつの頃からか物置の邪魔物となったり、請われてスキーメーカーへ寄贈したりして、今は手編みのリングが一つ残るのみとなってしまった。

中学二年生の夏、友と初めて白馬岳へ登った。佐渡ヶ島と日本海へ沈む夕日の素晴らしさに感動し、翌日からボツカをしながら毎日、日帰り白馬登山をしたのが山への病みつきである。もちろん子供用の登山靴もあろうはずはなく、大きめの地下足袋に雪渓ではワラジを履いたものだ。木製の背負い子と荷杖はかろうじて無事我家の物置に残っている。そんな頃、松本のヤマトヤ運動店で門田のピッケルを見つけてしまったのが運のツキというもの。

「社長さん、このピッケルを是非欲しいが、今はお金がありません、バイトをして買いたいから誰かに売らなideとておいてください、お願いします……」

「今日持っていけ、代金はできたときでもいい、置いとけば売れてしまうから」

「ありがとうございます。ありがとうございませ社長さん……」

というわけで翌年も白馬岳へボツカ、次は燕山荘へ住み込みバイトと、毎年の夏休みは山暮らしとなっていました。もちろんピッケ

ル代金は支払完了となり、ピッケルは今も私の宝物であり、部屋の壁で光っている。

登山靴はサラリーマンとなってからの産物であるが、当時はナーゲル（ニゲル）底靴）で、足首に折り返しが付いていてかっこよかった。トリコニーだとかムガードとかクリンカーだとか鉄の種類の講釈を言っている、松本の竹内靴店で足型をとってもらってはオーダーメイドした。横広のキスリングの重荷とバランスがとれるとかでとても重い鉄靴を履いたものだが、ビブラム底が出回りはじめ、鉄底を外して張り替えてしまった。今にして思えば鉄底のままにしておけばよかつた残念ではあるが、物置の邪魔物にするよりも、山岳博物館で展示してもらっている。

昨今は品数もお金も豊富になり、子供まで欲しい物がいつも簡単に手に入る時代である。飽きれば、傷めば何の未練もなく捨ててしまおう、物を大切に作る風潮など全く無い（極論かも知れないが）

何も無い時代に、工夫をし、手造りをし、大切に手入れをした物は、たとえ不細工でも、愛着がわき、いつまでも大切にしたいものだし、それこそが他人には他愛もない物でも、自分だけの宝物だと思う。

これからでも遅くはない、自分だけの宝物を見つけて、使い込み、そして大切にしたいものだ。

（大町山岳会会員・山博友の会運営部長）

山と博物館 第42巻 第11号

発行 一九九七年十一月二十五日発行

発行 千歳長野県大町市大字大町八〇五六一

大町山岳博物館

TEL 〇二六-二二二〇二二

印刷 大糸タイムス印刷部

定価 年額 一、五〇〇円（送料共二部手不可）

郵便振替口座番号 〇五四〇一七二二三三